

平成二十五年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二四号 抜刷

佐藤春夫と『太平広記』(二)

張

文

宏

佐藤春夫と『太平広記』(二)

張 文 宏

前回では、『太平広記』の諸本及び研究現状、佐藤春夫における『太平広記』取材の諸作品、「美しい絹を織る妻」とその典拠、仙人の話についてなどを論じてきた。その続きとして、本稿では「元無有」、「柳毅の話」、「任氏の話」という三作を取り上げ、佐藤春夫の翻訳・翻案の方法とその『太平広記』受容の特徴を明確にしようと思う。

五、「元無有」の訳詩

『太平広記』巻第三六九「精怪」中の「元無有」は、このような不思議な話を語っている。

荒屋で雨宿りをしている元無有という人は、月夜に吟詠の声を聞いた。それはお互いに寝めそやしあつた四人の声だったが、家中を捜してみると、きぬたの槌と燈火の台と水桶と破れ釜とがあるだけであつた。四人の吟詠の声はこれらのしわざであつたのである。

僅か三百字ほどの掌編から秋の月夜に廢墟に溢れた幻想的な雰囲気か漂つてきた。「元無有」に代表された古びた器物の

精霊たちは、自分の正体を仄めかす詩を詠んで夜明けとともに姿を消した。当時、詩からどんな器物かを推察した人間が、器物を見届けるために、燃やしたり土中に埋めたりというような処理をしなかつた。それは、器物にも生命があると信じていたからである。

「元無有」を典拠とした春夫の同名小説は「枕中記」と「馮燕伝」とともに、昭和十一年九月一六日に河出書房より発行された『世界短篇傑作全集』第六巻『支那印度短篇集』に収録された。「元無有」の訳出或は執筆の理由が魯迅『中国小説史略』に關係するのは、その「まえがき」に書かれている(傍線は佐藤春夫に拠る)。

伝奇の文を造り、会萃して一集としたものは唐代に多くあつた。而して名声牛僧孺の玄怪録に勝るものはなかつた。(略)その文は他の伝奇とあまり違つたところは無いけれども而し時々創作に出たものを發表して、必ずしも写実的であることを求めなかつた。蓋し李公佐李朝威の輩は、僅かに筆端の妙を顯揚するにあつた、だからなほ事情の虚を言

はなかつた。僧孺至つてはそれと同時に構想の幻を自ら見せようとした。因つて故らにその詭設の迹を示したのである。元無有は即ちその一例である。

(魯迅中国小説史略に馮る。——佐藤)

右の記述により、佐藤春夫が魯迅の『中国小説史略』に目を通したことは事実である。また同書第一〇篇「唐之伝奇集及雜俎」に『太平広記』所収の「元無有」の全文が書き入れられたから、春夫は直接に魯迅の著作を通して「元無有」を読んでいたかと思われる。傍線部「李公佐李朝威」は唐代伝奇「柳毅」を書いた文学者であるが、本章の第六節で「柳毅の話」と合せて論じることにする。まず「支那短篇小説管見」(前出)から「元無有」に対する春夫の評価を読んでおく。

元無有は田舎の空荘の月のさしこむところに家具が靈怪を表はすといふいかにも荒涼たる情致の自然なのを好しと思つた。古来の定評は知らないが近代的にはこの篇などは唐代の作品でも傑出した方であらう。あつけないものだが趣が深い。決して一家の趣味だけではないつもりだ。(中略)この短篇は僅かに三百字に足らぬ小品ではあるが、文学史上の珍重すべきを考えたからである。寓意や因縁談などの絶無なのも好い。¹⁶⁾

もちろん唐代の小説より唐詩のほうが名を馳せるが、両方も映発しあつて唐代の文壇を彩っている。安徽大学の呉懷東教授は、牛僧孺の詩と小説とは相互の影響関係が存在し響き合い、「元無有」はその絶好の例証であると強調している。春夫は「元無有」に満ちた神秘さと怪異の底に潜んでいる寓意に惹かれたためか、好評を唱えながら同名作品として翻訳してきた。同じく詩人であり小説家である春夫は、原作の「荒涼たる情致の自然な」ものに共鳴しやすく直訳を試みたのであると考える。「きぬたの槌」、「燈火の台」、「水桶」、「破れ釜」、この四つの器物の精霊たちがそれぞれ自分の正体を仄めかず詩は、「元無有」の中核的な存在だが、春夫が原詩に適宜の改変を施した教箇所に気づいたので、それらを次のように列挙してみよう。(改変と思われる箇所に波線を付した)

齊紈魯縞如霜雪　　寥亮高声予所発
 加賀の絹つくば根の絹　　置く霜の白き夜ごろに　　高鳴る
 われは
 嘉賓良会清夜時　　煌煌灯燭我能持
 まらうどらつどふ夕べの　　きらめける燈も　　わが捧げこそすれ
 清冷之泉候朝波　　柔練相牽常出入
 あさなあさな潜き入りては　　さやかなる水もて出づる
 われと知らずや

爨薪貯泉相煎熬 充他口腹我為勞

水たたへ火にも焼かるる 苦しみは身のためならで
人に食ましむ

右に示したように、佐藤春夫は『車塵集』と同じ翻訳手法や態度で、従来の堅苦しい漢詩の訓読法を捨て、歌語や五七調の韻律を導入し自身の抒情詩の如く訳詩を作り上げたのである。抒情的な思いを表出するように、彼は「白き夜ごろに」を書き入れたり「清夜」を「夕べ」となおしたりし、様々な意匠を凝らしている。そのような訳文は原詩の意に当てはまる、新鮮且つ韻律が美しい好訳であると思う。

原詩の「齊紈魯縞」は、日本の名物「加賀の絹つくば根の絹」と改変された。「齊紈魯縞」とは、中国古代の齊と魯という地方（現、山東省）原産の白い絹を指すが、後に上等な高価の絹織物の代名詞となった。また文末の「則雖阮嗣宗詠懷。亦若不能加矣」を、「たとひ人麀赤人でもかうはゆくまいといふ風であつた」と言い換えられたのは同じ翻訳手法であろう。阮嗣宗とは、名詩文「詠懷八十二首」を世に残した、三国時代の魏の詩人阮籍のことである。

春夫の「元無有」では「清冷之泉候朝汲、桑綆相牽常出入」の中の「桑綆」という言葉が抜かれたことは、はっきりする。それは削除ではなく、「桑綆」の意味が不詳であったのではなからうか。ちなみに比較として鈴木満氏の訳詩を以下に取り

挙げる。

清く冷たき井水を、朝な朝なに汲みてしか、
桑（の繊維）を編みたる釣瓶の縄で井戸に出入りをいたせし
か。¹⁸

鈴木氏の訳詩はわかりやすく原詩にびつたりしたものと云えるが、詩の韻律美と抒情的なものが半減になっていると認めなければならぬ。これに対し、佐藤春夫は「われと知らずや」を加え、詩の意味を正しく伝えると同時に、これで水桶の自負するさまを十分に表現できるのである。したがって、『車塵集』以来、原詩の意を守りつつ美しい日本語の韻律に合わせるといった漢詩の翻訳方法は、「元無有」の訳詩によって、改めて証明されるのである。

六、「柳毅の話」

「愛妖記」（昭和二年、前出）に収録された五話の中で、第一話「柳毅の話」と第三話「任氏の話」は、『太平広記』の唐代伝奇に素材を採った翻案作品である。「唐代の人が作った伝奇物語は少なからず残っているが、後世、このように評価の高い物は、この話（筆者注「西廂記」を指す）と李朝威の「柳毅伝」だけである」¹⁹と、魯迅は「柳毅伝」を絶賛している。「柳毅伝」の作者李朝威

は前節で「元無有」の作者牛僧孺と比べながら簡単に紹介された。高く評価された「柳毅伝」は、こうした人間と仙人との恋物語である。

書生柳毅は科擧に落第した。故里に帰る途中、綺麗な羊飼いの娘に出会った。この娘は洞庭湖の龍王の娘だった。龍女は涇川の水神の次男に嫁いだが、夫が道楽者で、舅姑に苛められ大変な苦勞をしている。そこで毅は、龍女から手紙を預かり、洞庭湖へ赴いて、龍宮にたどり着いた。龍宮の人々が娘の不幸を聞いてみな悲しんだ。洞庭君の弟にあたる錢塘君は涇川に行き、涇川の水神を殺して龍女を連れて帰った。洞庭君は盛宴で毅を慰勞し、錢塘君は酒に乗じて龍女を毅の嫁にしようと申し出たが、毅はこれを断り、たくさんの宝物をもらって帰った。毅は二度結婚したが、二人の妻は皆亡くなった。三度目に娶った蘆氏は龍女に似ている。そのうち、子供が生まれて一ヶ月した時、妻は「実は自分は洞庭の龍王の娘です」と打ち明けた。その後人間界で暮らした後、ついには夫婦ともに神仙となった。

昭和初期に『太平広記』から一連の「仙人の話」を翻訳・翻案した方法とほとんど同じく、昭和二六年に、佐藤春夫は同書第四一九巻の「柳毅」を「柳毅の話」と題し翻案した。この龍宮の物語について、彼は「柳毅の話」の「あとがき」において、このように記している。

柳毅の話は原題「柳毅伝」といつて、伝奇の中でも有名な

ものゝ一つです。竜女を主人公とした、いはゞ神仙ものともいへませう。豊かな財宝を得、美しい女に愛せられ、不老長生する、この一番単純な人間の欲望は古来無数の物語を産み出しているますけれど、傑れたものは多くありません。この物語などはその少いものゝ一つではないでしょうか。²⁰⁾

佐藤春夫は、典拠「柳毅」の後日譚と、「愚義之。為斯文」という原作者の感想文を削除した以外に、基本的には典拠に従い、長文の会話、歌や複雑な心理描写まで翻案してきたのである。だが、誤訳、誤写・誤植と思われるところを何箇所か見出すことができる。

その中で目立った誤訳は、「女遂於襦問解書」の「襦」の意味を間違え、「女は下着の中から手紙を取り出して」とした箇所である。「漢字源」では「襦」は「はだにつける柔らかい下着」と解釈されるが、『太平広記』と同じ編集者、同時期に世に問われた『太平御覧』巻六九五服章部一二「襦」に、漢の許慎の『説文解字』が引用され、「襦、短衣也」と書いてある。漢の史遊の『急就篇』にも「短衣曰襦、自膝以上」という説明がある。したがって、漢代から唐代までの漢籍では「襦」が上着を指すのである。

柳毅は蘆氏(龍女の変身)と結婚後、子供が生まれて一か月経つたことを祝う宴会(中国で「満月酒」と呼ばれる)を催し、親戚たちを集めてきたというシーンが春夫の作品に消えてしまった。そ

れは古代からの民間の習俗であり、現代の中国でも変わらずに大切にされているのである。

また、原文「吾君正幸玄珠閣」に抛り、「元珠閣」は「玄珠閣」の誤写であることがわかったが、他の翻訳・翻案作と比べると、「柳毅の話」に見られる、そのような誤写は極めて少ない。それに詩文と歌詞を含めて細部に至り全て訳出したのである。そうした態度には「柳毅伝」への愛着が込められていたと思われる。

春夫自らが言ったように、「豊かな財宝を得、美しい女に愛せられ、不老長生する」のは、「一番単純な人間の欲望」であり、そこから無数の物語が誕生するのである。中では、柳毅の物語は怪異且つ人情の濃厚さが横溢した雰囲気で見事と仙境とを巧みに錯綜させる。春夫はこれらに魅了されたらしく、平易な訳文を作り、作中の人物の間に絡んだ感情の変化を描き出した。例えば、濃厚な柳毅は、龍女への同情のため龍宮へ手紙を渡しに行ったが、救われて龍宮に戻った龍女と結婚してほしい錢塘君の強請を聞いて、彼は義理と信用を守るため、それを断った。初めに怒っていた錢塘君はようやく柳毅の考えがわかってきて、二人は友達となった。そこで、龍女は柳毅の人格にいつそう感服し、紆余曲折を経て、二人は結婚することになった。

かつて佐藤春夫は、「一時代の区々たる倫理観などにまどはされることなく、千古を貫く人性の尊重を創作の基準にする」²¹⁾

と、「歴史文学管見」において自分の文学観を表明している。人間の感情を尊び抒情的に詠い出す手法が佐藤春夫の詩から小説にまで一貫し、彼の翻訳・翻案作品にも及んでいるのである。そのような文学理念は「柳毅の話」にも窺えたが、次節の「任氏の話」を通して、この点を改めて確認しておきたい。

ちなみに、田中貢太郎も「柳毅伝」(『支那怪談全集』桃源社、昭和四五年一月)を発表したが、佐藤春夫の作品と比較すると、情景描写や人物の会話などが大量に省略されており、田中版は唐代伝奇「柳毅伝」を要約したものとと言っても過言ではない。

七、「任氏の話」

「愛妖記」(前出)の第三話「任氏の話」は、『太平広記』巻第四五二所収の「任氏」を典拠とする作品である。「任氏」という唐代伝奇は、魯迅が指摘したように、「狐の妖怪が、女に化けるが、最後までその人間の夫に忠実であるという話である。雖今之婦人有不如者(いまの婦人でも、これに劣る者がいる)。やはり諷世の作品であった」²²⁾。その粗筋を整理すると、次のようになる。貴族出身の韋崑の元で居候の身の鄭六は、妖狐と知りつつも任氏を妾にした。任氏は不思議な力を使って鄭に金儲けをさせる。任氏の美しさに心を惹かれた韋は鄭のいない時に任氏に迫った。しかし、任氏は夫に対する貞節を守ろうとし、韋はその様に自分を恥じ入り、それ以後は夫婦の面倒をよく見るよう

になる。後に鄭が武官として任地へ赴くのに、嫌がる任氏を無理やり連れて行つたところ、途中で犬に噛み殺されてしまった。鄭六は大変悲しみ、任氏を弔って帰って行つた。

簡単に言えば、任氏の物語は妖異譚或いは異婚姻譚である。この類は唐代伝奇に限らず『聊齋志異』にも随所に見出すことができる。春夫には『聊齋志異』による翻訳・翻案作品も少なくない。そして、彼は『聊齋志異』から「花妖や狐魅の夢幻的な趣のなかに人間味の親愛すべきもの」を見つけた。しかし、任氏は普通の妖怪と違い夫に尽くす良妻として造形され、その姿は感動的である。したがって「任氏」の特徴は、ほとんど文学作品に登場しなかった、女性に化けた狐妖の貞操観という点にあると思う。すなわち、任氏が良妻として夫に貞操を守ろうとしているところである。佐藤春夫は「任氏の話」を通して何を表わしたいのか。まずこの作品の「あとがき」を見ておこう。

任氏の貞操観についての考へ方は、ちょっと珍しいもので、ほかに余り類がありません。またその点に全然お説教臭いところのないことも、この小説の特異の点かも知れません。恐らく主人公が人間でないことがこの結果を産んだ理由でせう。結末のあはれも深い。「柳毅の話」とくらべて、市井の物語、つまり世話物の味のある点も唐代のものとしては珍しい方でせう。(傍点筆者)

春夫の「任氏の話」は「柳毅の話」と同じく、ほとんど典拠に従つて翻案したものである。後日譚もカットされた。その後日譚には、鄭六の栄達と卒年、韋崆の昇進と、原作者沈既済が韋崆から任氏の話聞いた経緯とが詳細に記載されている。また沈既済からの評論も入り、最後に沈既済が旅行中、友人たちに任氏の話伝えてから、それをまとめて後世に残すように頼まれたこともある。そのような貴重な補足資料を惜しまず削つた春夫の「任氏の話」は、硬く記録した形を避けたからこそ、最も小説らしく整つたものになっているのである。

沈既済という小説家はなお「枕中記」がある。それは日本人に馴染みの「邯鄲夢の枕」という話によく似ている。「枕中記」は『文苑英華』巻第八三三に収められたと同時に、「呂翁」と題し『太平広記』巻第八二「異人」にも編入されている。春夫は「枕中記」を典拠に同名作品と翻案した。前述のように、それは「元無有」と「馮燕伝」とともに『世界短篇傑作全集』第六巻「支那印度短篇集」(前出)に収録されている。春夫は沈既済に興味があつたらしく、「枕中記」の「まえがき」において、沈既済の生涯を詳しく紹介している。

大歴年中には沈既済がある。蘇州の呉の人で、経学該博で、楊炎の推薦により召されて左拾遺史館修撰となつた。貞元の時に炎が罪を得たので既済も亦処州の司戸参军に左遷されたが、やがて朝に入り、礼部員外郎に位して卒した

(約七五〇—八〇) 彼は建中実録を撰したがその才能を賞せられた。新唐書に伝がある。²³⁾ (傍線は佐藤春夫による)

中国でも、日本でも、「任氏の話」は「枕中記」ほど広く知られていない。だが、「人性の尊重を創作の基準にする」春夫からすれば、もちろん「あはれも深い」任氏の物語は、説教臭い「枕中記」より文学的価値がある。そして春夫は「任氏の話」の結末に意味深い「あとがき」を付している。中では、いわゆる「あはれ」は、狐である任氏の誠実さと、人間である鄭六の思慮の足りなさ、そこから生じた悲しい運命であろうか。そのような悲運の裏に秘められた哀しさに、春夫自身の観念と共鳴しているものがあるのではないかと思われる。春夫「任氏の話」にはその人間観察の確かさを感じるのである。ここで、「風流」論(『中央公論』大正一三年四月)の一節が浮んでくる。

私は一つの感覚であるところの「無常感」を風流の根柢だとも言った。(中略)「ものゝあはれ」と言ひ、「無常感」と言ふのは、実はこの最小限度に於ての生の執着と生の享楽とに外ならないのである。²⁴⁾

狐妖の任氏が人間生活から得た些かな幸せと、死ぬまで夫に忠実に貞操を守っていた執着と、春夫の筆の下にあるのは、「生の執着と生の享楽」であろうと感じられる。このような恋物語

に溢れた中国式の哀しみは、春夫のいわゆる、風流の根柢となる「無常感」に底通しているのではないか。したがって、中国古典を典拠に翻訳を行うのは、そこに含まれた彼自身の人生観と文学観を強調している有力な形の一つではないかと思う。

むすび

以上、『支那童話集』を中心に、佐藤春夫の『太平広記』取材の作品一四編を検討してきた。これらの作品にはいくつかのジャンルがある。例えば、親孝行の話もあれば、不老長生を求め仙人になる話もある。また器物の精霊の話もあれば、狐妖と人間の異類婚姻譚も、人間が動物に化した奇聞もある。選択された作品の多くは、中国では熟知された通俗的な物語でありながらも、初めて日本に紹介されたものである。「支那の文学ほど、彼の国の国勢や民情をよく現してゐるものも珍しくないのだから、翻訳が文化の理解に、この上もなく役立つであらう」と、春夫が自ら述べたように、彼は中国文学における翻訳の重要性を自覚している。この意味で、「支那趣味愛好者」と謙虚な態度を示す春夫は、中国文化の理解のために、翻訳・翻案の形で中国の古典文学の日本への伝播という役割を果たしているのである。

本稿の考察の中で、最も重視すべきなのは、春夫における『太平広記』の受容である。つまり『太平広記』を典拠とした佐藤

春夫の作品群から観察される、中国古代の精神を汲み取った有様である。まとめれば、それはおよそ次の三点に集中する。

第一に、「仙人の話」の一連作では、典拠の末尾にある後日譚を適宜に削ったり、難解な中国古代の風俗や習慣の一部を直したりしながら、基本的に原作を目指して直訳の姿勢を示しているのである。それは、中国の通俗文学の面白さを忠実に再現するためなのであろう。

第二に、「美しい絹を織る妻」に代表されたように、複数の資料を併用し、典拠にない内容を新しく加え入れたり、心理描写や人物会話などを多めに付け加えたりしながら、小説の色彩を強めて翻案の技巧を工夫しているのである。そこには、翻訳・翻案より、むしろ斬新な文学領域を開拓する春夫の思いが現された。換言すれば、佐藤春夫は漢文学の知識を生かし中国の古典文学を借用するという形を通して、自己の文学の社会性の欠如を補足しているのである。

第三に、「柳毅の話」と「任氏の話」という二作は、それぞれの典拠のエキスを基盤に、自分の文学観や人生観に合せた部分のみを巧みに拡大させる。特に「任氏の話」のような女性の悲運を描くのが得意な春夫は、そうした物語に秘められた哀しさを自作に織り込んでいきながら小説風に美しく見せようと翻案した。

要するに、佐藤春夫の場合は、いわゆる単なる翻訳・翻案ではなかった。原作の精神に対する自己の理解と共鳴、言葉の表

現の意匠とともに、春夫らしい独特な受容の姿勢を構築している。佐藤春夫の個性によつて開かれた中国の古典文学の紹介と研究は、当時の荒廃の中で注目を浴び、反響を呼んだのである。同時に、佐藤春夫には、文学の糧としての中国文学の存在の大切さがある。本稿では、『太平広記』取材の諸作品の検討を通して、以上の点を確認することができたと思う。

注

- (16) 「支那短編小説管見」(『定本佐藤春夫全集』第二巻、臨川書店 一九九九年五月、二五—二五二頁)
- (17) 吳懷東「論傳奇小説対中晚唐詩歌の影響」(『合肥師範學院學報』二〇〇八年第二期、参照)
- 中国語の原文は以下に掲げる。「盧全与牛僧孺是同時代人、盧的年輩稍長、兩人作品的接近、所賦写的実質上又都屬於咏物一類、他們創作所代表的正是詩歌影響小説、小説又影響詩歌的絶好例証。」
- (18) 鈴木満「日本民話「化け物寺」の由来—中国の源泉と日本への流入—」(『武蔵大学人文学会雑誌』第四〇巻第二号、平成二年一月、二八頁)
- (19) 魯迅「中国小説史略」(岳麓書社「中国湖南省長沙市」、二〇一〇年一月中の第九篇「唐之伝奇文(下)」(五三頁)に拠る。
- 中国語の原文は以下に掲げる。「唐人伝奇留遺不少、而後來煊赫如是惟此篇及李朝威《柳毅伝》而已。」
- (20) 『定本佐藤春夫全集』第三三巻、臨川書店、二〇〇〇年三月、四八頁
- (21) 「歴史文学管見」は、昭和三六年一〇月一日発行の『文学散歩』(第一〇号)に掲載する。本引用は『定本佐藤春夫全集』第二六巻(臨川書店、二〇〇〇年九月、二二二頁)に拠る。
- (22) 魯迅「中国小説史略」(今村与志雄訳「魯迅全集」第一一巻、学習研究社、昭和六年五月、所収。一三九頁)。

- (23) 『定本佐藤春夫全集』第三〇卷（臨川書店、一九九九年六月、三九六頁）
- (24) 「風流」論（『退屈読本』、大正二五年一月、二〇二頁）
- (25) 「日支文化の融合」（『定本佐藤春夫全集』第三二卷、臨川書店、一九九九年八月、七九頁）

〔付記〕 本稿では、『太平広記』からの引用は、一九六一年九月に中華書局より出版され、汪紹楹が校勘した中華書局本（全二〇巻、汪校本とも称する）に拠る。また、佐藤春夫の作品は、臨川書店より出版された『定本佐藤春夫全集』所収の本文に拠るが、旧字体は新字体に改め、ルビは省略している。

〔ちよう ぶんこう 河南師範大学外国語学部准教授〕